目黒稽古場だより

2025/12月
No.44

目黒稽古場　菊地実
090（4755）5697
megurokeikojo@sf7.so-net.ne.jp

【十一月稽古まとめ】

これを書いているのは十二月である。気づけば師走ではないか。一年の計は元旦にありと言うが、個人としても、目黒稽古場としても、その計通りに師走を迎えた年なんてないんじゃないかと思える。

「希望は人間を潰す」

ダン先生の名言だと思う。

希望を持ったために人生が狂う。理想を持ったために家族が路頭に迷う。崇高な目標を持ったために、生き物としての感覚を失ってしまう。

「理想は持たない」というのも理想のうちの一つかも知れないが、晴哉先生曰く、「ただ息している」ことに不思議さと尊さを感じるような稽古にしてゆくことが理想であると思える。

■稽古の種■

稽古会報告書に、稽古の内容とともに、その稽古に関連する話題や講話を載せないといけない。

以前の報告書を読みながら、こんなこと言っていたのかと読み返してみると、大抵は赤面ものだが、これは目黒だよりに載せてもいいのでは、というものを載せてみることにします。

「イルカの調教師」

以前テレビで、イルカの新米調教師の番組を見た。

どこの水族館なのかは忘れてしまったのだが、イルカの群れからはぐれた子イルカが捕獲されたということで、その水族館にやってきた。

子イルカだけを飼育するのは非常に難しく、世界では前例がないようで、大抵は親イルカから泳ぎ方を教わるのだが、親イルカがいない場合は、泳ぎ方が分からず、動かなくなって死んでしまうようだ。

その子イルカも特別な大きな水槽に入れられたのだが、自分では泳げないために水中に沈んでしまう。そのため、浮輪をつけて水面で呼吸ができるようにしていたが、動かない為に次第に尾が腐ってきて、餌も食べず、もう時間の問題である。

大勢の飼育員が水槽の外で応援している中、そのイルカの新米調教師はどうにかして助けたい一心で、自分が親になると決心し自ら水槽に入る。そしてその子イルカの前で幾日も泳いでみせた。初めは全く動く様子もない。

しかし大人のイルカの泳ぎをビデオを見て真似しながら、幾日も長時間水槽に入って泳いでみせた。

すると動かなかった子イルカのヒレが微かに動いた。そしてその調教師の動きに合わせるかのようにどんどんヒレを動かしはじめ、ついには泳げるようになり、子イルカは元気に成長していった。

その番組では、子イルカに見えるように泳いで見せたと言っていたが、実はそういった視覚の問題ではなく、調教師の「動き」そのものが伝わったように見えた。

一匹の子イルカだけがいる大きな水槽を、他の調教師が見ている。その風景は、いくら同情していてもスポーツを観戦している観客である。如何にして自分がその子イルカと同じ当事者になれるかという一心で、新米調教師は水槽に飛び込んだと思う。その当事者感覚があるからこそ、子イルカに動きとして伝わったように

思えて仕方ない。

私たちは、他者をみるとき、そして自分をみるとき、水槽の中のイルカを見ているように見てはいないか。

「バスケットボール」

高校生の頃、バスケットボール部に所属していて日々練習に明け暮れていた。

私の身長は当時、一七八センチメートル。バスケットリングの高さは三〇五センチメートル。高校一年生だった私はジャンプしてもリングには届かなかった。

飛び方を工夫したりして、何回もジャンプしている私に監督が言った。

「飛ぶのを止めて、何時間でもリングを見ていろ。そしたらリングが降りてくるから、その瞬間に飛べ」

そんなことでリングに触れるなんて、と思いながらジーッとリングを眺めていた。はじめは集注できず、目をそらしたり、他のことが頭に浮かんできりしていたが、次第にある集注の世界があると気づいた。当時は「集注」という言葉なんて分からないが、ある心地で見ると、リングが下がったり上がったりしている様にみえる。そして、最大に下がったと思った時にジャンプしてみた。

自分の手にリングの鉄の冷たさが伝わってきた。約三時間が過ぎていた。それ以来、リングに触れるようになった。

「漢方の修行」

薬学部を卒業し、ご縁があって、ある漢方の先生に弟子入りしていた。その先生は白衣に下駄という出で立ちで、黙って坐ればピタリと当たると噂の一風変わった先生であった。

その先生のしゃべる言葉には主語がなく、入門したての頃はハテナマークの連続であった。

「あれ持ってこい」

あれって何?

「具合はどう」

誰の具合?

「昨日なんて言ってた」

誰が?

など、など、何の話をしているのか分からない。

その先生は、患者と相談中に漢方薬を服用させるのだが、その時にも「あの漢方持ってこい」と言う。「あの漢方」と言われるのはマシな方で、大体は「あれ持ってこい」である。数百種類の常備している処方の中から「あれ」を推測して持って行くのは大変で、間違えれば副作用の危険もある。

一応、先生は「これ何?」と聞いてくるが、間違えればその場で怒鳴られ恥をかかされる。時には、漢方薬以外も「あれ」に含まれるので何を持って行けばよいのやら分からない。

患者と相談後、先生に「なぜあの漢方薬だったんですか?」と聞いても「虚証だから」とか「眉間にシワがよっているから」など質問した事を後悔する毎日だった。

漢方の勉強も然ることながら、相談中の先生の話に耳を凝らし、推測、推測、推測を繰り返していた。三年目ぐらい経った頃にようやく、段々と当たるようになってきた。その頃になると、患者の訴えを聞かなくても処方が頭に浮かんでくるようになっていた。

漢方は弁証論治法で組み立てられてゆくと参考書には書いているが、実際は病気ではなく、人を見る「勘」であると知った。

漢方の世界から足を洗って数十年が経ち、漢方の「勘」はもうなくなってしまったが、その時の経験なくしては、今の自分はいないと思う。こんな育て方をしてくれた師匠には感謝しかない。